

## B チャレ（提案公募型協働事業）【令和3年度】報告書

電話番号、E-mail は報告書問合せ用で非公開です。

|                                 |   |        |  |
|---------------------------------|---|--------|--|
| 提出日                             | 令和4年 2月 27日   | 記入者    | 細貝 朋央  |
| 団体名                             | <input type="checkbox"/> 任意団体 <input checked="" type="checkbox"/> NPO 法人 <input type="checkbox"/> 企業 <input type="checkbox"/> その他( )<br>特定非営利活動法人サンカクシャ   |        |  |
| 事業名                             | 地域に開かれたカフェを活用した孤立防止のためのつながり作り事業   |        |  |
| 協働団体                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 跡見学園女子大学 板東ゼミ</li> <li>・ 文京区社会福祉協議会</li> <li>・ 教育センター等の行政支援機関</li> <li>・ 地域の子ども若者支援団体</li> <li>・ 株式会社シード</li> <li>・ 地域住民</li> <li>・ 地域の企業</li> <li>・ スーパーバイザー</li> </ul>   |        |  |
| 自団体<br>および<br>協働団体<br>の<br>役割分担 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ サンカクシャ：団体運営のカフェおよび居場所におけるボランティア人材の活動機会の創出</li> <li>・ 跡見学園女子大学 板東ゼミ：ゼミ生のボランティア派遣</li> <li>・ 文京区社会福祉協議会：子ども若者・保護者の対応の連携</li> <li>・ 教育センター等の行政支援機関：子ども若者の紹介</li> <li>・ 地域の子ども若者支援団体：子ども若者の紹介</li> <li>・ 株式会社シード：本郷拠点及びカフェの物件提供（～8月末）</li> <li>・ 地域住民：千石拠点の物件紹介（10月～）</li> <li>・ 地域の企業：サンカククエストの機会提供</li> <li>・ スーパーバイザー：相談会の実施</li> </ul> |        |  |
| 担当者名                            | 細貝 朋央   | 役職等    | ボランティア・コーディネーター  |
| 電話番号                            | 03-6905-8287  | E-mail | <a href="mailto:tomohisa.hosogai@sankakusha.or.jp">tomohisa.hosogai@sankakusha.or.jp</a> |
| 部門<br>(1か2<br>いずれか<br>○)        | 1 課題解決部門(該当の場合、いずれかの番号に○)<br>(1) 幅広い年代を対象に性の多様性への理解を促す活動<br>(2) 地域コミュニティの継続的な運営をIT等でサポートする活動<br>(3) ひきこもり当事者の中間的就労の場を拡大するための活動<br>(4) 男性の高齢者の継続的な参加につながる地域活動<br>(5) オーラルフレイル予防に気軽に主体的に取り組める地域の仕組みづくりを行う活動<br>○ (6) 中学校卒業後の不登校等の孤立状態に対応できるボランティアを育成するための活動<br>(7) 外国にルーツがある児童・生徒についての生活や学習支援活動<br>(8) その他、団体の専門性を生かしたテーマで提案された取り組み<br>2 地域活性化部門                                  |        |  |

|   |   |
|---|---|
| <p>目的</p> <p>地域のどんな課題を解決したいかを明記<br/>提案時と再掲でも可</p> | <p>1. 背景</p> <p>日本における子ども若者の死因の第1位は自殺で、コロナの影響を受け、2020年8月の10代の自殺者数は前年度の3.6倍にのぼるほど、子ども若者を取り巻く現状は深刻になっている。自殺の要因としては、様々な見解があるが、自殺対策支援センターライフリンクの清水康之さんは、自殺のリスクは「生きることの促進要因（生きることを支える要因）」よりも「生きることの阻害要因（生きることを困難にさせる要因）」が上回ったときに高くなると語っている。コロナの影響も受け、生きることが困難になる事態に陥りやすくなっているが、それ以上に安心できる、信頼できるつながりを作ることや生きがいを得られる関係性や場を作ることが大事になる。</p> <p>文京区においては、10代の「不登校」の出現率の高さが伺える。</p> <p>特に、中学生の不登校出現率は、平成29年に5.38%になり、東京都平均3.78%を大きく上回ってしまった。令和元年度の文京区は5.08%、東京都平均は4.76%と、文京区の出現率は減少傾向はあるが、東京都の不登校出現率は増加している現状にある。</p> <p>現状、学校に馴染むことができないと孤立しやすい現状にあり、不登校及び不登校傾向にある子ども若者の孤立を防ぐことが大事になる。</p> <p>そして、義務教育中は支援機関や地域のサポートなど届けやすい状況にはなるが、義務教育終了後の教育機関の支援が途切れやすくなってしまふこと、18歳になると児童福祉法の支援対象外となるなど、行政の支援が減ってしまう現状がある。</p> <p>義務教育中から不登校の子どもとつながり、地域で義務教育終了後も継続して伴走していく体制作りを行うことで、子ども若者の孤立を防ぐことに寄与できると考えている。</p> <p>2. 前年度の活動</p> <p>(1)家庭訪問事業</p> <p>不登校や引きこもりで地域の中で孤立している子ども若者のうち、地域の居場所などに来ることができない状況にある子に対して、家庭訪問を行った。</p> <p>コロナの影響も受け、対面での訪問だけではなく、オンラインで個別に話す機会を設けるなど、感染予防対策の観点からできる範囲でも活動を行なった。</p> <p>(2)ボランティア育成</p> <p>オンラインで関わるボランティアを募集し、8名の大学生が参加していただいたものの、オンラインでのボランティアマネジメントに苦戦した。</p> <p>一方、跡見学園女子大学の板東ゼミとの連携がスタートし、ボランティア同士の交流会が始まり、家庭訪問や居場所で子ども若者によりそう人材育成活動をスタートさせることができた。</p> |
| <p>事業内容</p>                                       | <p>昨年度、若者が働く経験を磨く地域に開かれたカフェを開設し、地域の人との交流やつながり、子ども若者を応援したいという人が増えるきっかけとなった。</p> <p>昨年度は、居場所などでの人との交流は求めているものの、いきなり知らない人がいる居場所に行くことができない子ども若者のために、家庭訪問を行っていた。家庭訪問はコロナの影響もあり、家庭に伺い、関わることの難しさ、保護者や関係者との連携の難しさなどを痛感した。</p> <p>しかし、アウトリーチのためのイベントを定期的で開催したところ、家庭訪問以上に新しい子ども若者とのつながりが生まれた。居場所という閉じた空間ではなく、開かれた場所で、気軽に参加できるイベントを開催すると、つながりを作ることが難しい不登校及び不登校傾向にある若者と繋がることができると考え、本事業を実施した。</p>   |

地域に開かれたカフェは、場所としてもオープンで気軽に参加することができる。そしてイベントは子ども若者が関心を示すボードゲームなどを中心に、大学生による進路相談などの機会も組み合わせて行うことで、気軽に参加できる、かつ相談もできる空間が作れるようになる。

年度当初、本事業では以下2つの取り組みを予定していた。

1. 地域に開かれたカフェを通じて、子ども若者と繋がるアウトリーチイベントの実施
2. 子ども若者によりそう人材の育成

しかし、春先から夏にかけて、緊急事態宣言が散発的に発令され、「アウトリーチイベントの開催」を見送らざるを得ない状況が続いた。また、その最中に、カフェで使用しているビルの管理会社からビルの取り壊しが決まり、8月末でカフェの営業に一区切りをつけることとなった。

一方で、居場所に若者が定着していくためには、どのような人がいるかという要素が非常に大きな影響を与えることがこれまでの活動を通じて学んだことである。

子ども若者が安心して、家の外の機会や場に繋がれるように、最初に出会う人の存在はとても大きい。そのため、寄り添っていく支援者に対しての研修や活動の理念の浸透が重要になる。

そのため、本事業では、『「子ども若者によりそう人材の育成」を行い、「つながった若者たちが定着していくためのコンテンツや活動を行っていく』』という方針に9月から変更することとなった。昨年度から連携を始めていた跡見学園女子大学とは連携を強化していけるように、人材育成の体制を構築しながら、連携大学の学生及びサンカクシャのボランティアに研修の機会や理念の理解を深めていく機会を提供してきた。

実施内容①：居場所での活動

日時：毎週水曜・土曜の14時～20時

場所：文京区本郷（8月末まで）、文京区千石（10月以降）

主に文京区内の若者たちに向けた居場所を運営し、ボランティアに毎回参加いただき、現場で若者と関わっていただいた。毎回の居場所終了後に1時間程度で運営振り返りを行っており、ボランティアは自由参加としているが、ほとんどの方々に毎回参加していただくことができた。ボランティア・コーディネーターが振り返りのファシリテーター役として入り、その日の職員の若者への関わり方の意図や若者の背景情報などを引き出して、ボランティアに理解しやすいように言語化を補助することで、ボランティアの方々の活動への理解を深めるとともに、ボランティア自身が若者との関わり方を改善していく意識を醸成することができた。

また、ボランティア・コーディネーター自身が居場所に入ることで、ボランティアの質を保ち、若者やボランティアの間で起きうるトラブルの芽を摘む役割も担った。たとえば、受験勉強中の若者の横で、若者に関わることもせずに、大学の授業に対する不満を大声で一緒に参加した友人とぶちまけていた学生ボランティアがおり、若者の受験勉強へのモチベーション低下が危惧されたため、居場所後に学生ボランティア本人たちに注意を行い、その後の参加態度への改善を促した。また、自身の恋人を居場所に連れてきたボランティアもいたが、若者と関わることもせずに恋人同士で話してばかりの行動を取っており、若者に対してだけでなく、団体の活動現場への影響も憂慮されたため、厳重注意と今後の活動参加停止の可能性を示唆することで、その後の行動改善を促した。

実施内容②：若者との関わり方相談会

日時：毎月第四土曜日 11 時～12 時

場所：zoom を使用したオンライン開催

参加者：ボランティア 1～2 名/回

本事業のスーパーバイザーとして文京区教育センターの石津様に、ボランティアの方々が日頃の活動の中での若者との関わり方で困ったことやちょっとした悩みなどを相談できる希望者限定のオンライン相談会として毎月開催した。ボランティア・コーディネーターは希望者の募集と質問の事前取りまとめから、当日の進行役も担った。相談会においては、相談者の質問内容に補足説明を加えたり、相談の背景の深掘りを行うことで、石津様がより適切な回答ができるようにサポートを行った。

実施内容③：ケース会議

日時：毎月 1 回平日夜 20 時～22 時

場所：zoom を使用したオンライン開催

参加者：ボランティア 1～2 名ずつ/回

若者 1 人ひとりの近況を共有しつつ、今後の関わり方やアクションを検討していくオンライン会議として毎月開催した。ボランティアは自由参加としている。ボランティア・コーディネーターは、参加したボランティアが会議の内容についてこれるように、補足説明を加えたり、ボランティアに話を振ることで、内容理解の促進につながる役割を担った。

実施内容④：ボランティア交流会

ボランティア同士の横のつながりと職員との関係づくりを目的にオンライン交流会を 7 月、8 月、11 月に開催した。(2022 年 3 月にも開催予定)

ボランティア・コーディネーターがファシリテーター役を担うことで、単なる親睦会に終始させずに、現場での振り返りなどでは出てこなかったボランティアの悩みや不安を表出させ、その解消につなげることができた。

実施内容⑤：バイト伴走 (イッシュヨニバイト)

若者の仕事探しや生活の相談を気軽にできる大人との関係構築を目的としたプログラム「イッシュヨニバイト」の若者伴走ボランティア (第一期：8 月～11 月) を実施。居場所ボランティアや新規募集をかけて計 17 名が参加した。2022 年 2 月末時点では、第二期プログラムのスタートに向けて企画調整中。ボランティア・コーディネーターは、本プログラムの第一期の設計と運営および進行役を他職員とともに行った。

実施内容⑥：サンカククエスト伴走ボランティア

若者の職業体験づくりを目的としたプログラム「サンカククエスト」での若者伴走ボランティア。2022 年 2 月末時点では、計 2 名にご協力いただいたが、今後は本プログラムで若者伴走をするボランティアを増やしていく予定。

実施内容⑦：他団体連携企画での若者サポート

東京藝術大学の藝祭、インターネットラジオ OTTAVA 等の他団体との若者向け連携企画を実施す

|                               |   |
|-------------------------------|---|
|                               | <p>る際に、若者が参加しやすいようにサポートするボランティア。計6名のボランティアにご協力いただいた。ボランティア・コーディネーターは、各企画にご協力いただくボランティアの方の選定と声掛けから、企画当日の役割設定を行い、ボランティアが若者伴走しやすい環境づくりを行った。</p> <p>実施内容⑧：若者の個別対応</p> <p>個別対応段階の若者と性格や趣味が合いそうな人に依頼をして、担当職員とともに個別対応に入ってもらっていただく（若者との野球観戦、若者とのキャッチボール等）居場所ボランティアの中から計3名にご協力いただいた。ボランティア・コーディネーターは、担当職員と話し合いを重ねながら、ご協力いただくボランティアの方々の選定と声掛けを行い、担当職員との事前打ち合わせを設定して、そのボランティアの方が若者の個別対応に参加しやすい段取りをつけて実行した。</p>   |
| <p>協働団体<br/>or 利用者<br/>の声</p> | <p>・協働団体の声①</p> <p>3年間、教育センターでスクールソーシャルワーカーや総合相談室で相談をしている（た）お子さんの紹介先として連携をしています。サンカクシャにつながったお子さん達の成長を聞くことが多くなりました。</p> <p>安心できる人間関係を築けることが最も大切だと感じています。そのような人材を育てるためにボランティアの育成に力を入れ、ケース検討会をzoomで行うこともしてきました。一人でも多くの子どもが、仲間と一緒に活動することの楽しみを知り、その中で自己成長していくことができるよう、これからも連携していけたらと思います。</p> <p>（文京区教育委員会 教育推進部 教育センター 主査(心理)教育相談コーディネーター 石津陽子）</p> <p>・協働団体の声②</p> <p>毎年、公認心理師(心理の国家資格)希望の本学の大学院生を数名、学外実習としてお引き受け頂いています。諸般の事情で、止む無く、学校や社会に馴染めず躓いた多くの若者が、居場所として、また、「社会サンカク」の機会の提供を受けながら、自身の成長と取り組んでいる場所です。そのような貴施設で、本学の院生たちは、貴重な支援実践型実習を経験させて頂いています。構造化されたカウンセリングとは一味も二味も違う支援の有り方を学んだ院生達は、「支援」という多様性、奥深さを理解していきます。院生にとって、その経験は、大学院修了後の彼らのキャリア発達にかけがえのない礎となっています。</p> <p>（跡見学園女子大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻 教授 宮崎圭子）</p> |
| <p>協働による<br/>効果</p>           | <p>主に居場所を中心に、利用者と年齢的にも価値観的にも近く寄り添うことができるボランティアは合計42名が参加した。そのうち、跡見学園女子大学 板東充彦先生のゼミ生と宮崎圭子先生が担当する修士課程の実習生たちは13名（ボランティア総数の3割）が継続的に参加して、非常に大きな力となっただけしたことを実感している。</p> <p>また、居場所での若者との関わりだけでなく、10～11月に行ったクラウドファンディングの実施サポートや他団体との連携企画における若者サポート、居場所での若者向けのコンテンツの実施においても跡見学園女子大学の学生たちが中心となって活躍した。</p> <p>若者に関しては、今年度にサンカクシャとつながった新規ケースが居場所に来た際には、個別対応職員としか会話ができなかったのが、次第にボランティアや若者と交流を重ねることがで</p>  |

|                                      |   |
|--------------------------------------|---|
|                                      | <p>きるようになっていき、新規ケースの居場所定着につながった。これは、年齢が近い大学生が若者たちと関わられるようにコンスタントに参加していた効果ともいえる。</p> <p>その他にも、文京区内の企業と若者の機会づくりのための連携を行った。広報誌、WEB サイト等の企画編集を行うデザイン制作会社の株式会社トライからは、発送物の梱包業務を若者向けに機会提供をいただき、学生服リユースショップのさくらや文京店からは、学生服や体操着の刺繍取りの業務依頼をいただいた。これらは若者の職業体験プログラム「サンカククエスト」として行い、その実績をもとに、新たな企業との連携につなげていく足掛かりとなっている。また、インターネットラジオ OTTAVA には、声優に興味がある若者に対して自社スタジオでラジオパーソナリティ体験の機会をつくっていただいた。その後も、OTTAVA の公式 Youtube チャンネル上にて、若者が作成した文京区内のおすすめスポットを紹介する動画を公開する企画も進行中である。何よりも、ボランティアがサポートしながらも若者たち自身で行きたいスポットを決めて、現地でのお店などへの取材から動画編集までを行う本企画を通じて、若者達自身が自分で考えたり、取材や動画編集を自分でやり抜く経験を得られたことが大きかった。本企画に参加した若者は、その後も少しずつ新しいことにチャレンジしようとする意欲が出てきている。</p>   |
| <p>事業成果<br/>および<br/>今後の活<br/>動予定</p> | <p>事業3年目となる今年度は、サンカクシャ全体として新規事業や新規プログラムを立ち上げて、活動の規模が広がる一年でもあった。その一方で、昨年度には数十人いたボランティアは、参加後もほとんど放置気味か現場に参加するフローも不明瞭だったこともあり、2021年度当初には片手で数えられる人数しか参加継続できていない状況であった。そこに、ボランティア・コーディネーターが入ることで、まず居場所において若者に関わることができるボランティアの参加フローや参加ルールから作り直していき、ボランティアが安心して参加し続けられる基盤が整備されていった。</p> <p>2021年8月以降からは、居場所での若者との関わりだけでなく、若者の個別対応や社会サンカク事業のプログラムで若者のサポートをするボランティアの役割を新たに設けたことで、2022年2月末時点では約42名のボランティアに継続的に参加していただくことができた。その約半数が、居場所において若者向けに企画などのコンテンツを実施したり、以下のようにマガジン記事（団体ウェブサイト上の活動報告記事）や団体主催イベントにおいて、自身の体験談を話すことを通じて、「子ども若者によりそう」ことを発信することができる人材となってきている。</p> <p>以下、ボランティア体験記のマガジン記事（うち2つは、跡見学園女子大学の学生の体験記）</p> <p>「ボランティアとしてできることは、その場を楽しむこと」【ボラ体験記・第1弾】<br/> <a href="https://www.sankakusha.or.jp/magazine/220216/">https://www.sankakusha.or.jp/magazine/220216/</a></p> <p>若者たちの秘めている力に、気がつく瞬間が印象的で【ボラ体験記・第2弾】<br/> <a href="https://www.sankakusha.or.jp/magazine/220223/">https://www.sankakusha.or.jp/magazine/220223/</a></p> <p>“若者の居場所”に必要なボランティアのスタンス【ボラ体験記・第3弾】<br/> <a href="https://www.sankakusha.or.jp/magazine/220226/">https://www.sankakusha.or.jp/magazine/220226/</a></p> |

また、現在予定しているボランティア募集説明会（2/10、3/10、4/20に開催）にて、計6名のボランティア（各回2名）が自身の体験談を参加者に向けてプレゼンをすることが確定している。

若者にとっては、文京区内の大学の学生が参加していることで、同じ地域で生活している身として一定の刺激になることが期待される。また、参加するゼミ生にとっても、自身が通う大学の周辺地域に住む若者と関わることで、卒業後の進路や自分の人生の指針を考えるきっかけになっているようで、子どもに関わる仕事に就こうと考えているという意思表示をする学生も出てきていることは、「子ども若者によりそう人材育成」の1つの成果と言っても良いであろう。

また、文京区内の複数の企業と連携して活動できたことも、今後につながる重要な要素として挙げられる。2022年度以降は、文京区においても社会サンカク事業や居住支援事業を積極的に展開していく方針となっており、千石拠点がハブとなり、地域の様々な企業との連携企画やサンカククエストを通じて、若者が社会とつながっていくことができる場としての活用にも力を入れていきたい。

他方で、現在活動に参加している大学生・社会人ボランティアはそれぞれで進級やライフステージの変化にともない、参加頻度や参加の仕方に変化が生じている人も出てきている。

今後は、半年ごとを目安にして新たに募集をするとともに、継続参加するボランティアを増やしていくための機会づくりやボランティア以外にもサンカクシャの活動に関わることができる役割も必要であると考えている。

跡見学園女子大学との連携に関しても、翌年度以降も板東ゼミや実習生受け入れを継続させつつ、学生の学年が上がったり、卒業後も参加しやすいようにコーディネートをしていく。実習生に関しては、今年度の受け入れ人数は2名だったが、2022年度は倍の4名を受け入れることが確定している。また、板東ゼミからも新3年生がサンカクシャの活動に参加する予定である。新しい学生たちが合流することで、1人ひとりの若者を継続的に見守っていくことができる支援者たちの芽（目）が育つように文京区の事業を発展させていきたい。

ボランティア人材育成全体においては、今年度の基盤を活かして、若者に寄り添う伴走の機会をさらに拡充していくことで、若者伴走ができる人材を増やしていきたい。そして、やがてはサンカクシャの活動のみならず、各々の日常や仕事においても若者や他者に寄り添うことができる人材の育成が、NPOとして地域に還元できる価値であると考えている。

※別紙1：事業スケジュール 報告

※別紙2：収支決算報告

※別紙3：関係者マップ 報告（提案時の内容と比較できる状態）

※追加別添1：この事業を通じて制作したチラシなどのデータ

※追加別添2：この事業の様子分かる写真のデータ（10枚以内）

【提出先 E-mail】 [fumikomu@bunsyakyō.or.jp](mailto:fumikomu@bunsyakyō.or.jp)

問合せ先 : Tel : 03-3812-3044 (担当 : 田邊、山ノ内)





1

2

>

## 別紙2: 収支決算報告

作成日: 令和4年2月26日

## Bチャレ(提案公募型協働事業)【令和3年度】

団体名: 特定非営利活動法人サンカクシャ

収入 1,000,649 円 ←下記を入力すると合計値が出る計算式が入っています。

| 費目        | 決算額         | 積算根拠   |
|-----------|-------------|--------|
| 「Bチャレ」助成金 | 1,000,000 円 | 課題解決部門 |
| 自己資金      | 649 円       |        |
|           | 円           |        |

支出 1,000,649 円 ←下記を入力すると合計値が出る計算式が入っています。

| 費目     | 決算額       | 積算根拠                                    |
|--------|-----------|---|
| 人件費    | 500,000 円 | ボランティアコーディネーター 月5万円×10ヶ月                |
| 事務局人件費 | 300,000 円 | 事務局 月3万円×10ヶ月                           |
| 旅費交通費  | 125,725 円 | スタッフの交通費(4人分)                           |
| 謝金     | 42,300 円  | 研修謝金2回分                                 |
| 消耗品費   | 19,014 円  | イベント時の文房具など                             |
| 支払手数料  | 13,610 円  | コート使用代(1610円)+野球観戦チケット(アウトリーチ)(12,000円) |
|        | 円         |   |
|        | 円         |   |

